

京都近郊農山村における柴・薪の行商活動

—明治前期から1950年代の八瀬・大原を事例として—

橋 本 暁 子

- I. はじめに
- II. 八瀬・大原における林野の所有形態からみた柴・薪の行商を行う人々の特徴
 - (1) 集落単位でみた林野と住民の生業との関わり
 - (2) 集落内における林野の所有形態
- III. 柴・薪の生産・運搬・行商活動の特性
 - (1) 八瀬・大原における柴・薪の生産方法
 - (2) 個別事例からみた柴・薪の運搬および行商活動
- IV. 柴・薪の行商活動を取りまく環境の変化
 - (1) 燃料販売店の増加
 - (2) 事例燃料販売店にみる取り扱い品目の推移
 - (3) 柴・薪の需要低下にともなう地域の変化
- V. おわりに

I. はじめに

行商は今なお世界各地で行われる商業活動の一つであり¹⁾、日本では伝統的な商業活動の一つとして着目されてきた。地理学においては、関東大震災以降から1960年代まで盛んに行われた東京行商の実態に関する研究²⁾のほか、丹後野原地区における海産物行商を扱った田中³⁾らによる研究がある。民俗学の分野ではより広い地域での行商活動の実態が報告され、柳田国男をはじめ、北見⁴⁾や瀬川⁵⁾らによる研究が知られる。北見は、交易

の起源や原初的な様態、市に関する伝承、運搬法、行商人による文化伝播などを明らかにした。瀬川は、西日本を中心に漁村に住む女性の暮らしについて詳細に調査し、女性が行商活動を担う例が多い事を示した。日本の地理学と民俗学に限ってみると、行商研究は行商活動が盛んであった1960年代までに蓄積され、当時の行商活動の実態解明に力が注がれた。

行商活動は、高度経済成長が終わり、行商人が減少していくなかで再び注目され、農家基盤に着目して勅使川扇状地畑作農村における明治期以前の農産物の野売り⁶⁾と大正昭和期の衣服の行商活動を検討した溝口⁶⁾、水産物行商人を中心に、移動就業行動の時空間的展開を明らかにした中村による一連の研究⁷⁾、民俗学では、福岡県志賀島の女性水産物行商人「アキナイシ」による博多での行商活動の事例を取り上げた増崎⁸⁾、千葉県佐原への野菜供給地であった篠原地区の野菜行商人と青物屋の家族を扱った小林⁹⁾などの研究がある。溝口が、明治期以前と大正期以降では行商活動の内容および農業との関わり合いが変化したと指摘したように、単に行商活動の実態解明にとどまらず、変化とその要因の分析に視点が置かれるようになった。一方、中村は自動車営業とそれまでの「在来型行商」を比較し、自動車営業によって消費地市場勢力圏が拡大して産地市場勢力圏と等しい半径を有す

キーワード：近代、京都、近郊農山村、行商、大原女

る点を導き出すなど、消費地との結びつきが意識されている。同様に増崎は、瀬川の関心は「農民と漁民との接触交渉」であり、都市との交渉には着目していないと指摘し、「アキナイシ」の販売先である都市側の変化にともなう行商活動の変化を考察した。また小林は、篠原を佐原の「シンノミ畑」、すなわち汁の実やおかずにするための野菜を多量かつ少量ずつ作る自給用の前栽畑と捉えており、野菜の供給地と販売先の関係が意識されている。中村、増崎、小林の研究においては、販売先である都市側の変化が行商活動に及ぼした影響が明確に意識されている。

先行研究が示す通り、行商活動の時期、取り扱い品目などの違いによって行商の形態が異なることが確認できる。大別すれば、生産活動と行商活動が分離せずに継続する形態、かつては生産活動を行っていたが流通方法の拡充により行商活動のみに特化しようになった形態、発生時より行商活動にのみ特化していた形態である。行商活動の形態やその変化の要因を解明するためには、それぞれを分けて捉える必要がある。そこで本稿では、生産活動と分離せずに行商活動が継続された例として、京市中への柴・薪の供給を担ってきた大原女¹⁰⁾の行商活動を取り上げる。ここでの京市中とは、1879年に上京区と下京区が置かれた範囲、すなわち東は賀茂川付近、西は千本通り付近、南は八条通り付近、北は北大路通り付近とする。以下、この範囲を京市中、京市中の住民を都市住民と記す。

八瀬・大原は、平安末期より柴・薪を採取し、京市中へ柴を頭上運搬して振り売りによって売り歩いた大原女の里として知られる。大原女は中世の女性行商人と解され、大原女に関する主たる研究は室町時代を対象とするものであった¹¹⁾。しかし、大原女は大原の女性に限られず、さらに中世のみならず第二次世界大戦直後まで存在し、昭和20年代以降、急速に衰退したことも周知されている。

たとえば岩田¹²⁾は、この終焉期の大原女に着目し、民俗学的手法によって八瀬と大原の大原女経験者11名とその夫4名への聞き取りを行い、大原女の服装、柴の採取・運搬方法、農作業や山仕事の年間作業内容、柴漬けの作り方などを採録した。岩田による終焉期大原女の詳細な聞き取りは、往時の大原女による行商活動や暮らしを具体的に描き出した点で貴重である。しかし一方で、農地所有面積の広狭が行商活動の頻度の多少に影響することを示唆しつつも、農地や林野の所有面積については明らかにしていない。また、八瀬・大原の差異について触れつつも、全体としては同様の地域と捉えているきらいがある。

一方、筆者¹³⁾は八瀬と大原の比較を軸に、山林所有の形態、山林所有の実態と柴・薪の伐採・採取と販売時期の差異、輸送方法の相違点や18世紀半ばから20世紀半ばにかけての輸送方法の変化を明らかにし、さらに、八瀬の山林の柴・薪採取権に関する資料(1932～1958年)から、1952年以降は八瀬の購入者がなくなり、他村落からの購入者が増加したことなどを指摘した。しかし、柴・薪の行商を行う人々の特性や、明治前期頃から増加する燃料販売店¹⁴⁾との競合、柴・薪の需要低下にともなう生産地域の変化についての検討までは及んでいなかった。

そこで本稿では、明治前期から1950年代までを対象時期とし、八瀬・大原における柴・薪の生産活動の実態を踏まえ、受容地である京市中における行商活動の衰退過程を明らかにする。近年、上田寿一、宇野日出生らを中心に大原の古文書が調査され、松下・田口¹⁵⁾および田口・松下・宇野¹⁶⁾は、大原の山林に関する近世・近代文書を紹介・分析した。本稿では、これらの研究成果も援用しつつ、検討をすすめたい。

本稿では行商に関わる事柄を、行商(活動)、行商を行う人々、行商品に分けて捉え

る。手順としては、Ⅱで柴・薪生産地域の特徴および集落内における行商を行う人々の特徴を、Ⅲで具体的な生産方法と行商活動の方法およびそれらの変化など行商活動の実態を明らかにする。さらに行商を行う人々の輩出地と、受容地である京市中それぞれの変化を捉えるため、Ⅳでは1節と2節で京市中における柴・薪の取り扱い店舗や需要の変化から行商活動が衰退した要因を挙げ、3節では京市中の変化に伴ってどのように輩出地が変化したかを検討する。ⅡからⅣを踏まえたうえでⅤでは、明治前期から1950年代までの京都近郊農山村の住民による行商活動の実態とその変容について本稿で明らかになった知見をまとめる。

八瀬・大原は比叡山の西側、高野川沿いに位置する集落である(図1)。八瀬は修学院の北側、大原の南側に位置する。南北朝期の後醍醐天皇の綸旨以来、近世期には京都所司代の下知状によって、天皇や幕府から年貢や諸役が免除されていた¹⁷⁾。中世以来の8つの小字名である長谷出・稲小出・久保・南出・上田・宮ノ田・甲賀小路・妙見は現在も俗称町名として存在する¹⁸⁾。

大原には、草生村、野村、井出(井手)村、勝林院村、来迎院村、大長瀬村、上野村、戸寺村の「大原八郷」あるいは小出石村を加えた「大原郷九ヶ村」と称される近世村落が存在し、近世において大原という地名はこれら8か村ないし9か村を総称する郷名であった。1883(明治16)年に前述の8か村が合併して大原村となり、さらに1889年には大原に北部の小出石、百井、大見、尾越の各村を合併した。小出石の集落は標高280メートル前後にあるが、百井、大見、尾越の集落は標高600メートル以上にある。小出石以南の9集落と北部の3集落は性格が異なるため、本稿では主に南部の9集落を対象とする。

八瀬と大原の集落を南北に通る若狭街道は、中世には「重量物以外の運送や旅行者の

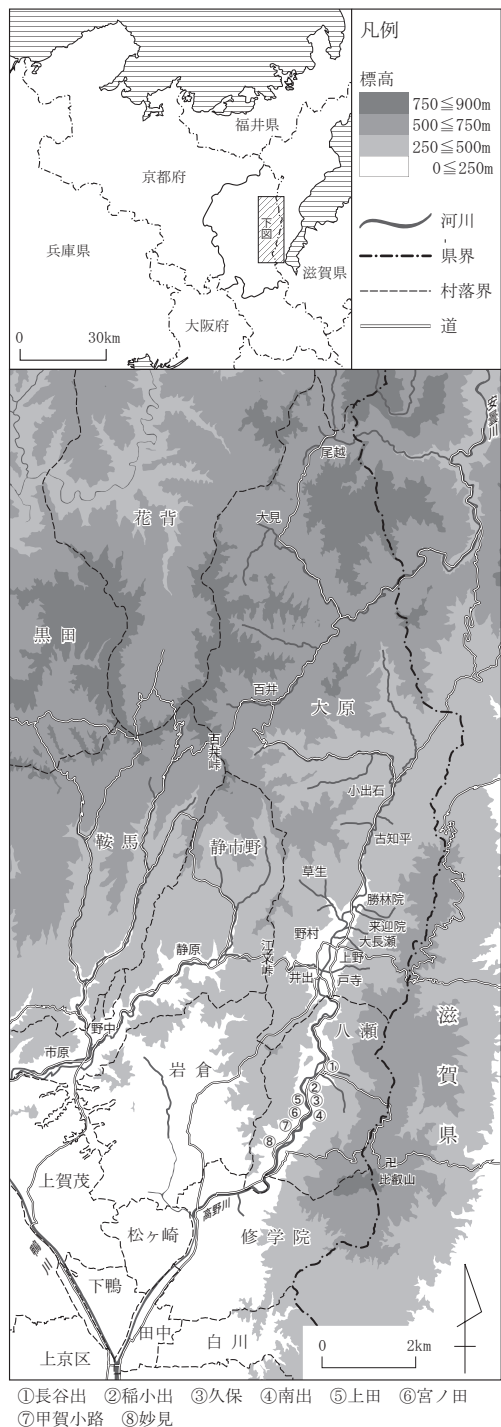


図1 研究対象地域

注：村落界および地名は、各正式2万分の1地形図(1912年発行)をもとに示した。

若狭への通行にはメインとして用いられた」という¹⁹⁾。とくに大原には地域柵(「大原柵」)の存在を示す史料が1498(明応7)年から1584(天正12)年にかけて残されており、大原はすでに16世紀には若狭街道の中継地として重要な機能を果たしていたと考えられる²⁰⁾。

なお本稿では、大原女を含めて八瀬・大原に居住して柴や薪を採取し、京市中にそれらを運搬して販売した人々を「柴・薪の行商を行う人々」とする。以下、柴とは主に樹木の枝(パイタ)や下草(シバ)で着火用に用いたものを指し、薪とは主に樹木の幹を割った割木(ワリキ)のことで燃料として用いたものを指す。

Ⅱ. 八瀬・大原における林野の所有形態からみた柴・薪の行商を行う人々の特徴

(1) 集落単位でみた林野と住民の生業との関わり

まず、柴・薪の行商を行う人々の輩出地の特性を明らかにする。表1に『京都府地誌』²¹⁾に含まれる『愛宕郡村誌』(1881年)と、『愛宕郡村志』(1911年)²²⁾に記された田畑面積・山林面積・戸数・人数・牛馬数・物産・民業を示した。八瀬の田は22.3ha、畑は2.4ha、山林は352haである。図1と照らし合わせても、八瀬は狭小な河谷に集落と耕地が展開し、周囲を山林で取り囲まれた地域であることが分

表1 明治期の八瀬・大原における生業および物産

村落名	集落名	面積(ha)			戸数	人口	牛馬数	物産		民業	
		田	畑	山林				種類・量	販売先	男	女
八瀬	八瀬	22.3	2.4	352	131	677	15	薪類凡3,000駄	京都	農業凡5戸採薪者104戸	採薪者150人其余雑業及ヒ行商ヲ為ス
大原	草生	9.8	2.5	1,110	42	223	13	薪類10,000束炭1,000俵	京都	農ヲ専業トシ余ハ山ニ入り採薪焼炭ス	各夫業ニ従ヒ、余暇薪ヲ戴キ、京都市街ヘ行商ス
	野	7.0	3.9		34	160	12	薪5,000束炭300俵	京都	男女農ヲ専業トシ余暇山ニ入り採薪焼炭ス	
	井出	10.9	2.9		33	159	6	薪11,000束炭300俵	京都	農業ヲ専トシ余暇山ニ入採薪焼炭ス	夫業ニ従フ
	勝林院	14.0	4.3		36	169	7	薪凡9,000束炭1,000俵	京都	男女俱ニ農ヲ専業トシ余暇山ニ入、採薪焼炭ス	
	来迎院	11.2	6.2		39	166	9	薪類13,000束	京都	男女皆農ヲ専トシ余暇山ニ入り、採薪或ハ焼炭ス	
	大長瀬	4.1	3.6		19	102	1	薪類5,000束	京都	農ヲ業トシ及ヒ採薪雑業等ヲナス	各夫業ニ従フ
	上野	19.6	3.7		34	176	12	薪類14,000束炭500俵	京都	各農業ヲ専務トシ山ニ入採薪焼炭ス	夫業ニ従フ傍、京師ニ行商ス
	戸寺	9.9	2.7		42	200	11	薪類12,000束炭500俵	京都	農ヲ業トスル者15戸、余ハ採薪業トス	農事及ヒ採薪共ニ夫業ニ従フ
	小出石	8.8	2.9	1,000	66	148	8	炭1,100駄薪150駄	京都	京都男女皆農ヲ業トシ傍、採薪ヲ業トナス	
	百井	4.1	1.1		26	116	10	馬鈴薯8石8斗5升炭1,200俵	—	男女皆農ヲ業トス	
	大見	11.3	3.5		16	82	12	炭400駄	小出石鞍馬	男女皆農ヲ業トス	
	尾越	4.9	0.5		12	66	8	炭300駄	小出石鞍馬	男女農業・採薪ヲ業トス	

資料：『愛宕郡村誌』(1881)、『愛宕郡村志』(1911)より作成。

注：1) 田畑面積は、『愛宕郡村誌』の「税地」に記載された数値を使用した。

2) 山林面積は、『愛宕郡村誌』には記載されていないため、『愛宕郡村志』の数値を使用した。

3) 村落名は1889(明治22)年から1949(昭和24)年まで使用された村落名を、集落名は近世村落の地名を示す。

かる。民業には男性のうち104戸が採薪を生業とし、女性は150人が採薪、その他は雑業および行商活動を行っていたこと²³⁾、物産として薪類を約3,000駄（約450トン）²⁴⁾京市中へ運搬していたことが記されている。

一方、大原では田畑の面積は集落ごとに差があるものの、民業に大原の12集落はいずれも農業を生業としていることが記されている。物産として、上野、草生、勝林院、戸寺、井手、野、小出石が薪類と炭、大長瀬と来迎院は薪類のみ、大見と尾越は炭のみ、百井は炭と馬鈴薯の記載がある。大原12集落では農業のかたわら薪類の採取と炭焼き²⁵⁾あるいはそのどちらかを行い、草生、上野の民業の女性の記述に「各夫業二従ヒ、余暇薪ヲ戴キ、京都市街へ行商ス」、「夫業二従フ傍、京師二行商ス」とあるように、それらを女性が京市中で行商していた²⁶⁾。大見と尾越の物産の項には、炭を小出石と鞍馬に輸送および販売していたとの記載がある。大原から京市中への柴・薪の行商は日帰りが基本であったため、その北限が小出石村であったこと、小出石村は以北の村落からの物資の中継地であったことが考えられる²⁷⁾。京市中と周辺農山村との北東の境が出町柳であると仮定すると、図1と表1から、洛北の農山村からの日帰り行商圈はおおよそ20km以内であった。

(2) 集落内における林野の所有形態

次に、林野の所有状況から、集落内でどの

ような人が行商活動に携わっていたかを検討する。

八瀬の山林地主が所蔵する「土地台帳」²⁸⁾をもとに、1890年の八瀬における規模別山林所有の形態を表2に示した。「土地台帳」には山林地目として合計1,182筆（127名）が記載される。20ha以上の山林を所有する6名が八瀬の山林の41.6%を所有する一方、96名は所有面積が2haに満たない。八瀬は、農地を含めて少数の大規模地主と多数の小規模土地所有者がおり²⁹⁾、土地所有面積の少ない住民にとっては柴・薪の採取と販売が重要な生業であった³⁰⁾。実際に、1932年から1958年までの柴・薪の売買記録を所有する八瀬のある山林地主は、「土地台帳」に記された山林所有面積は約26.2haであり、後述する行商活動を行っていたA家の山林所有面積は約0.73haである。

共有林は字御所谷に2か所、字谷山に2か所、字千束ヶ谷に1か所の計5か所で、合計面積は15.26haであった。共有林はマツの自然生えで、村落内の住民に承諾を得られた場合、住民が生活の補充に充てるためにマツを伐採することができた。

表3には、「山地券御渡願」³¹⁾をもとに、1872年の大原来迎院村における規模別山林所有の形態を示した。「山地券御渡願」は地券の発行を願い出た際の文書であり、来迎院村184筆の山林所有者、その字名、面積が記されている。所有者の多くは来迎院村在住者と

表2 八瀬における規模別山林所有の形態（1890年）

区分	山林所有面積	所有者数	面積合計 (ha)	割合 (%)
個人所有林	20ha以上	6	144.39	41.6
	5ha以上、20ha未満	11	96.36	27.8
	2ha以上、5ha未満	14	40.69	11.7
	2ha未満	96	50.18	14.5
共有林	—	—	15.26	4.4

資料：八瀬松井家所蔵「明治23年8月調製 乙 土地台帳 愛宕郡八瀬村」より作成。

表3 大原来迎院における規模別山林所有の形態（1872年）

区分	山林所有面積	所有者数	面積合計 (ha)	割合 (%)
個人所有林	20ha以上	6	293.1	35.6
	5ha以上、20ha未満	17	169.2	20.6
	2ha以上、5ha未満	6	19.6	2.4
	2ha未満	2	2.2	0.3
寺社所有林	—	4	255.1	31.0
共有林	—	—	84.0	10.2

資料：来迎院町所蔵「山地券御渡願」より作成。

みられるが、野村の大地主の名や寺院名も記されている。記載された山林面積87町6反1畝15歩のうち、寺領31.0%，共有林10.2%，個人所有は58.8%であった。山林所有者31名のうち、20ha以上の山林所有者は6名、5ha以上20ha未満の山林所有者は17名で、所有山林が2haに満たない住民はわずか2名である。大原来迎院村では、小数の大規模山林所有者の存在は八瀬と同様であるが、寺社所有林が多い点、住民も5ha以上の山林所有者が多い点は八瀬と異なる³²⁾。

大原では自家の山林から柴・薪を採取したが、八瀬では大規模山林地主の山仕事に従事する代わりに柴・薪を採取するか、柴・薪の採取権を購入³³⁾することで自家の山林からの不足分を補っていた。

Ⅲ. 柴・薪の生産・運搬・行商活動の特性

(1) 八瀬・大原における柴・薪の生産方法

八瀬で山林を20ha以上所有する大規模山林地主は、第二次世界大戦後にスギ・ヒノキを植林するまでマツを建築用材として販売した。マツによる収入に重点を置いていたため、山林所有面積がおおよそ2ha未満の住民に下草(シバ)刈りを依頼する代わりに、伐採した下草は無償で供与した。

八瀬では山林の所有面積が小規模な家では、年間を通して夫婦で柴・薪の伐採と行商による販売をともにに行い、さらに男性は建築用材の伐採・間伐・枝打ちなどの林業に従事した。柴・薪にはクヌギ・ミズナラ・コナラ・ホスなどの雑木や低木を用いた。雑木は木を切り倒した後にナタで枝を落とし、柴と薪に分別した。木の切り倒し・枝落としは主に男性が、枝集めと柴・薪を束ねる作業は女性が担った。雑木は10年ほどで柴・薪として伐採できる大きさに成長するため、雑木の生えた山は10等分し、輪伐を行って毎年柴・薪を採取できるように利用した。また、夏季には農業のかたわら、青柴³⁴⁾を麴屋に販売し

た。

大原では、1940年代後半頃、4月は田の耕起、5月から6月に田植え、7月に草刈り、10月に稲刈りと、4月から7月までと10月は農業に従事し、柴・薪に関する作業は農閑期に行った。まず4月の田の耕起前までに柴・薪となる樹木を伐採する「柴刈り」を行う。雑木のうちクヌギ・コナラなどの幹を薪(ワリキ)に、それらの枝(バイタ)やヤマツツジ・ホーキギ・カナギなどの低木を柴に、カシなどの硬木を炭にした。樹高3mほどの雑木の幹は根元から大ノコギリで伐採した後に小ノコギリまたはナタなどで枝を落とす。樹高2mほどの低木は柴刈りカマで刈り取った。伐採、枝落とし、柴刈りは主に男性が行い、木の幹、枝、柴の根元(カブ)を山に作られた堀に対して垂直方向にし、まとめて置いた。女性は、男性が刈ったワリキ、バイタ、シバをそれぞれ直径1mほどに束ねて縄でくくり、それらを山から麓まで引いて下ろし(図2)、大八車に積む作業を繰り返した。1日の作業を終えると、夫婦で大八車をひき、ワリキ、バイタ、シバを家の前に建てた作業小屋に運んだ。夫婦によるこうした作業を1ヶ月ほど行い、その後はワリキ、バイ



図2 集落に下ろしたワリキ・シバ・バイタの束
(昭和30年頃、大原・中川修一氏撮影)

伐採し、束ねたシバ、ワリキおよびバイタの束。1番右および右から3番目がはバイタ。右から2番目がワリキ。残りはシバ。長さは2～3mに及ぶ。この後、それぞれ裁断して30cmほどの長さにする。

タ、シバを10月まで乾燥させた。

10月に入ると、稲刈りの合間の雨天時に男性はワリキとパイタの薪割り、女性は柴を「アテ」と呼ばれる高さ50cm程度の丸太の上で、ナタを用いて30cm程度に切りそろえる「コナス」作業を行い、シバの周りにパイタを巻いて見栄え良く束ね、3つ束ねた「タイコ柴」³⁵⁾の状態にした。11月になると夫婦あるいは妻のみで大八車をひいて得意先まで運搬し、販売した。この行商活動は、11月から2月頃までの秋から冬にかけて行った。

大原では、柴および薪は自家の山林から伐採・採取したが、山林を所有しない農家では、村落内の山林地主に雇用されることが多く、主に妻が柴・薪の行商を行った。

(2) 個別事例からみた柴・薪の運搬および行商活動

本節では、聞き取り調査によって判明した個別事例をもとに、柴・薪の運搬および行商活動について述べる。図3に、1909(明治42)年から1930(昭和5)年生まれの八瀬・大原および静市野大字静原の女性6名の柴・薪行商の従事期間を示した。このうち、本節ではA、DおよびFについて詳述する。なお、本稿で静市野についてはこれまで述べてこなかったが、静市野のなかでも東部に位置する大字静原では柴・薪の行商を行い、西部の野中や

市原では野菜の行商を行っていた(図1)。八瀬と大原を周辺地域の中で位置付けるため、本節では静原の事例についても提示する。

1) Aの事例

Aは、1909(明治42)年八瀬生まれの女性である。Aは1926(昭和元)年に17歳で八瀬内のA家に嫁いだ。農業のかたわら義父の柴刈りを手伝い、大八車で京市中へ柴を運搬して行商を行った。Aが柴刈りに従事していた当時は、八瀬の「西山」はマツばかりであった。所有山林が小規模なA家ではその伐採・間伐・枝打ちやマツの下草刈りに従事する代わりにそれらが無償で譲り受け、柴・薪として販売した。Aが柴売りの行商に従事していた当時、男性が大八車をひく家もあったが、柴の行商はほぼ女性の仕事であった。女性のみで行商に出る際には比較的軽量の柴を運搬し、夫婦で行商に出る際には重量の薪を加えて運搬した。薪は柴より高値であったが、女性のみで行商に出た家の方が多かったという。柴刈り時はもんぺを着用して頭に手拭いを巻き、行商時にはさらに外出用の2幅半の前掛けを巻いた。

10日に一度程度の頻度で行商に出かけ、行商に出ない日は柴・薪の採取や束ねる作業を行った。得意先は五条河原町から三条大宮にあり、得意先から頼まれた量を販売した。西

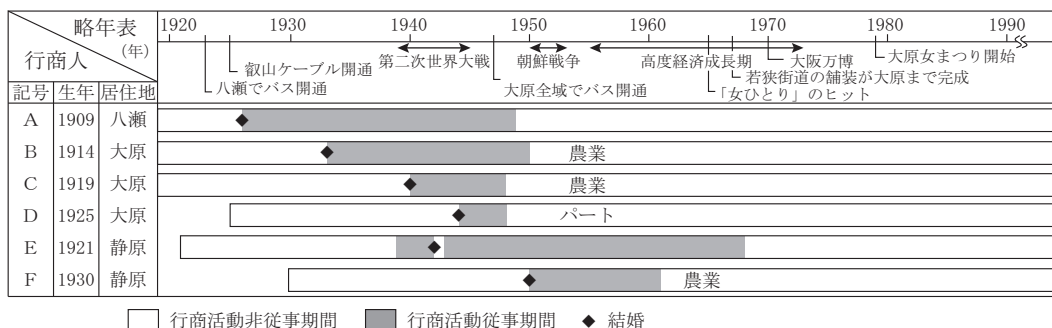


図3 八瀬・大原・静原の女性による柴・薪行商の従事期間

資料：聞き取りより作成。

陣へも売りに行ったことがある。薪炭問屋に卸すよりも高収入が得られる固定客の獲得を重視し、日帰り限界の地域まで行商に出た。1940年代になると、高野上開町や赤ノ宮にある薪炭の小売店へも卸すようになった。第二次世界大戦後、京市中にガスが普及したことにより、1948年、Aは40歳で柴・薪の行商活動を終えた。

八瀬では行商に出ることを「キョウマ」あるいは「キョンマ」と呼んだ。八瀬で「ウマ」は母を指す言葉であり³⁶⁾、京へ出る母の意味と考えられる。1950年代後半には八瀬から柴・薪の行商に出る女性がいなくなり、「戦後は大原（から京市中へ行商に出る人が多かったの）では」と話す。集落内の坂道で大八車を引く際、子どもに手伝わせるなど、柴・薪の加工・運搬・販売は夫婦ならびに家族労働であった。

2) Dの事例

Dは、1925（大正15）年大原井出町生まれの女性である。1944（昭和19）年に19歳で大原野村町のD家に嫁いだ。Dが結婚した当時、D家には既に義父母はおらず、60代の義祖父と義祖母が農業に従事していたため、Dは農業には従事せず柴を中心とした行商を始めた。しかし1948年に事故で夫を亡くし、義祖父、義祖母と3人の子どもを養うため、柴・薪の生産および行商活動をやめ、集落内にある旅館へ働きに出た。行商活動に従事した期間は4年ほどである。

D家は田6反、畑2反と大原ではやや多く所有し、米の裏作に麦を栽培していたため、農業のみの収入でも生活することができた。しかし、柴の収入はその日の現金収入となるため、農閑期には臨時の出費に備えて行商に出て蓄えた。

義祖父、義祖母、夫のいずれかと行商に出ることもあった。夫や義祖父が同行する場合、男性が牛か大八車を引き、Dは補助をしながら付いて行き、売る際にDが頭の上に載

せた「ワ」³⁷⁾の上に柴をイタダいた。女性が販売した方が見栄えが良いという。「ワ」は直径22cm、厚さ5cmほどのワラで編んだドーナツ型の筒で、中心に5cmほどの穴があり、頭に載せたものを固定することができる。「ワ」は、Dの義祖母が作業の合間に作った。薪を売る際は義祖母と一緒にいき、義祖母が販売した。「カチグルマ」と呼ぶ大八車は、ゴムの付いていない鉄でできた二輪のタイヤで、上に長さ3m、幅1m30cmほどの木製の板を乗せたもので、前方に方向を変える棒と、バランスを保つために板の中心あたりから紐が伸びている。柴・薪の切り口をそろえてかみ合わさるように大八車の板に平行に積み、その上から縄をかけた。一度に大八車に載せられる柴・薪の量は、合わせて30束ほどで、商家などでは2～3軒分、一般家庭の6軒分に相当した。薪は1束5銭であった。行商に出る際は、木綿の着物で緋の半纏、立ち掛け、頭に手拭いを巻いて出かけた。1軒に対して7から10日に一度の頻度で赴いた。10日間は柴・薪の加工に要する日数であり、また1軒が燃料を消費する日数でもあった。

得意先によっては、柴のみを購入する家、葉がついたままの整形していない枝を購入する家、あるいは柴と薪を合わせて購入する家があるため、あらかじめ得意先の希望に合わせて必要量を積んで出かけた。得意先は義祖母から引き継いだ修学院の5軒の他に、Dが新規開拓した元田中の個人宅が1軒と市役所前のホテルがあった。さらに修学院の薪炭問屋や出町柳の薪炭問屋、八瀬の酒屋、京市中の銭湯などへ販売することもあった。ルートは、大原街道から新田街道を経て出町柳の問屋まで出た。行商活動の合間に、修学院の鯖街道沿いでおかずを購入し、持参したおにぎりを食べた。このルートで朝7時に大原を出て16時頃に帰ってきた。得意先にはナスとキュウリの柴漬け³⁸⁾を歳暮として贈った。

得意先からは、下駄や手拭いをもらうことがあった。

1948年頃、大原から柴・薪の行商に出る女性は、Dが幼少時の約半数に減少していたという。大原の女性は、大規模地主の妻を除き、結婚すると義母に教わりながら農業と柴・薪の行商活動を始め、50歳代まで続けるのが一般的であった。八瀬を経由して大原街道へ出たが、八瀬から柴・薪の行商に出る女性は高齢との印象を受けたという。

3) Fの事例

Fは、1930(昭和5)年、静市野大字静原生まれの女性である。1950年に20歳で静原内のF家に嫁ぎ、結婚後に農業と柴・薪の販売を始めた。F家では農業よりも柴・薪の販売による収入を重視していた。1950年代の柴・薪の行商による1カ月の売上は約200円程度であった。

静原では5～10人が山林地主の山をくじで割り当てる「割山」を行った。くじで引き当てた箇所を山林地主に報告し、木が腐りにくいとされる夏の「土用の入り」の日に雑木を伐採し、稲刈り後まで山の中で乾燥させた。11月半ばになると、3mほどに切ったフジツルで200束ほどに束ね、頭の上の「ワ」に2束ずつ載せて山のふもとまで下ろし、さらに数日間スギの木の下に立てて置いた。山道は、1日に5往復するのが精一杯であった。雪が降りそうになるとスギの木の下に立てて置いた雑木の束を「カタビキ」と呼ばれる大八車に5束積んで家の前の小屋に運び、「アテ」の上で40cmほどの長さにコナシ、直径40cmほどの束にした。クヌギ・カシ・クリの薪は京市中への販売用で、スギ・ヒノキの幹は木材に、その枝は自家用の燃料に用いた。

義母と行商に出ることもあったが、義母が高齢になると大八車に積んだり、柴をコナす作業を手伝ってくれた。近所の女性と3名ほどで京市中まで行商に出ることもあった。Fはコナした柴・薪を40～50束ほどと、他人よ

りも多く大八車に積んだ。きれいに整形したものを大八車の目につくところに載せて縄でくくって売りに出た。京市中に出る際は、緋の半纏に3幅半の前掛けをし、紺のタチカケ、姉さんかぶりをした手拭いの上にワを乗せて、木綿の襦をした³⁹⁾。Fが運搬する量は多かったため、行商に出たのは1カ月に1度程度であった。得意先は上賀茂から北大路の今出川通や大宮通、烏丸通の西に10軒程度持っていた。薪炭問屋は大宮通にあり、個人宅に販売するよりも安価であった。柴・薪の行商活動においてはそれぞれに得意先が決まっており、他人の得意先に販売することはなかったという。Fが柴・薪の生産および行商活動に従事したのは1961年(31歳)までで、その後は農業に従事した。第二次世界大戦中は配給制で薪を売ることができなかったため、義母は他の荷物⁴⁰⁾の中に隠して薪を運び、検問を避けたという。静原の薪は大原のものよりも見た目がキレイであったという。第二次世界大戦後は大八車のタイヤが鉄製からゴム製になって車輪自体が大きくなったため、運搬が楽になった。

4) 小括

以上の話を総合すると、行商活動の具体的な内容は以下の通りとなる。まず行商活動は結婚後、嫁ぎ先の義母に教わりながら始められた。行商に出る際には、義母や夫が同行することもあった。自分の母親や祖母が行商に出る姿を見ており、結婚後に行商活動に従事することは、八瀬・大原の女性にとって当然のことであった。行商活動の頻度は、家によって差があるが、10日に一度から1カ月に一度程度であった。これは所有する水田や林野の面積とも関わる⁴¹⁾。行商の販売先は義母から引き継いだり自身で新規開拓した個人宅などの得意先に加えて、薪炭問屋や小売店があった。他人の得意先に販売することはなかった。得意先へは販売する柴・薪の状態や量があらかじめ決まっていた。売れ残りは薪

炭販売店に卸し、大八車に積んだ分はすべて換金してから帰路についた。

次に、京都近郊農山村における柴・薪の行商活動の特性を以下の4点にまとめた。

1 点目は、柴や薪の生産、運搬および販売は、八瀬・大原以外の地域でも行われていた点である。おそらく京市中から20km以内程度で山林資源を所有する地域では、同様に採取し、徒歩による行商活動が行われていたことが推察できる⁴²⁾。八瀬・大原・静原の事例からは、柴・薪は自家の所有山林から雑木を採取する場合と、大規模山林地主の山から針葉樹の下草刈りや枝打ちの業務に従事する代わりに刈らせてもらう場合の2種類があった。

2 点目は、いずれの地域でも農業を主業とし、柴・薪の生産および行商活動は農閑余業として行われていた点である。農地を所有している場合は農業を基本とし、副業として夫婦で柴・薪の行商に出たが、農地が少ない場合は夫が農外の人夫として雇われるため、女性のみで行商を行った。行商活動の収入のみで生計を維持することは不可能であったといえる。しかし、柴・薪は即時に換金できたため、農業による収入を補填する上で重要であった。

3 点目は、夫婦による作業を基本としていた点である。男性は雑木や下草の伐採、切った木の枝落とし、およびその後の薪割りを担い、女性は男性が伐採した雑木や下草をくくって山から下ろし、秋には柴を切り、束ねた。柴刈り、柴切り、運搬など、柴・薪の行商に関わる作業はいずれも夫婦で行った。販売は女性の場合もあるが、男手があると大八車に大量に載せてひくことが可能となり、より多くの収入を得ることができた。大原のDが、1948年に夫が亡くなったことにより柴・薪の生産・販売をやめ、旅館のパートに出るようになったことから、夫婦のいずれかが欠けると行商を行えないことが分か

る。収益と作業内容の両面で、男性のみあるいは女性のみでは困難であったためと考えられる。

4 点目は、行商活動による収益を上げるために得意先の確保に工夫がなされた点である。大原の女性の得意先が修学院から河原町御池付近であったのに比べて、八瀬の女性の得意先はより遠方の五条河原町から三条大宮まで行商に出た。静原の女性は、八瀬・大原から柴・薪の行商に出る女性の得意先を避け、上賀茂から北大路、千本今出川にかけて行商を行った。また、柴・薪をより見栄え良く整形することで付加価値をつけたり、歳暮として柴漬けを得意先に贈ったりした。柴・薪の行商活動が衰退した要因は次章で述べたい。

IV. 柴・薪の行商活動を取りまく環境の変化

(1) 燃料販売店の増加

明治期には道路や鉄道の整備により、京都市街には全国から移入された薪炭の流通量が増加し、燃料販売店が増加していく。表4には「薪炭木産出並消費高等調査」⁴³⁾をもとに、1879(明治12)年7月から翌年6月の上京区、下京区および伏見区における薪炭移入量とその移入元を示した。薪は京都府内の笠置、宇治などのほか、滋賀県大津や大阪からの移入が多く、炭は大阪の池田、大阪府下、滋賀県のほか、宮崎県の日向炭、高知県の土佐炭などがみられる。京都近郊のみならず、府外からも供給されていたことが分かる。大阪からの供給が多い理由として、海運によって大阪に移入された薪炭が舟運などによって京都市に移入されたためと考えられる。そこで、図4に1877年の大阪への薪炭の移出先および量を旧国別に示した⁴⁴⁾。薪は四国および九州の東側沿岸の旧国のほか、紀伊、播磨、安芸、淡路からの移入が見られ、炭は紀伊、土佐に次いで日向、豊後、伊予、阿波、播磨、備前からも移入されていた。京都市街お

表4 京都市における薪炭の移入量と供給地
(1897年7月～1898年6月)

a. 薪			
種別	供給地	員数	需要区
クヌギ	山城国相楽郡笠置	323,800束	伏見
	摂津国大坂	46,000束	伏見
	山城国綴喜郡田原郷	38,000束	伏見
雑薪	山城国綴喜郡田原郷	210,770束	伏見
	摂津国大坂	22,400束	伏見
	山城国相楽郡有市村	20,000束	伏見
	大坂府下江戸堀	14,919束	上京
	近江国大津	5,780束	下京
	山城国相楽郡笠置	5,500束	伏見
	山城国相楽郡大川原	3,000束	伏見
	山城国愛宕郡鷹ヶ峯	1,400束	伏見
	山城国宇治郡志津川村	1,200束	伏見
ヒノキ	山城国相楽郡笠置	153,300束	伏見
	山城国綴喜郡田原郷	100,000束	伏見
	摂津国大坂	2,000束	伏見
マツ	摂津国大坂	157,176束	伏見
	摂津国大坂	■1,636束	伏見
	山城国綴喜郡田原郷	169,292束	伏見
	山城国宇治郡醍醐	84,000束	伏見
	近江国滋賀郡山中村	3,600束	下京
	山城国愛宕郡鷹ヶ峯	3,564束	伏見
	山城国宇治郡志津川村	1,200束	伏見
b. 炭			
種別	供給地	員数	需要区
カシ	摂津国大坂	95,530俵	伏見
	紀伊国牟婁郡熊野	14,180俵	伏見
	大坂府下江戸堀	13,365俵	上京
	摂津国大坂	10,958俵	下京
	大坂府下堀江 2丁目	5,363俵	下京
	日向国臼杵郡延岡	4,000俵	伏見
	大坂府下道頓堀 4丁目	1,370俵	下京
	山城国伏見区第二組	260俵	伏見
	土佐国安藝郡安藝	120俵	下京
マツ	摂津国嶋上郡道齋	7,715俵	伏見
	摂津国嶋上郡道■	7■00俵	伏見
	近江国滋賀郡山中村	1,200俵	下京
	近江国大津	916俵	下京
	摂津国原村	555俵	下京
	摂津国能勢郡	500俵	下京
雑炭	摂津国大坂	100,700俵	伏見
	山城国相楽郡笠置	50,000俵	伏見
	大坂府下堀江 2丁目	24,420俵	下京
	日向国臼杵郡延岡	22,000俵	伏見
	近江国大津	12,263俵	下京
	近江国滋賀郡大津	7,290俵	伏見
	近江国滋賀郡山中村	2,520俵	下京
	山城国愛宕郡鷹ヶ峯	1,763俵	伏見
クヌギ	紀伊国牟婁郡田辺	16,800俵	下京
	日向国佐伯	700俵	下京
	摂津国能勢郡吉野村	289俵	下京
日向炭	日向国佐伯	116,921俵	下京
	日向国臼杵郡延岡	9,612俵	下京
	摂津国大坂	6,070俵	下京
	大坂西横堀	454俵	下京
土佐炭	土佐国都産	50,000俵	下京
	摂津国大坂	1,300俵	下京
	土佐国三崎	36俵	下京
池田炭	摂津国池田	500俵	下京
	摂津国能勢郡	500俵	下京
	摂津国能勢郡吉野村	2,298俵	下京
熊野炭	紀伊国熊野	20,360俵	下京
大津炭	近江国滋賀郡大津	1,600俵	下京

資料：京都府立総合資料館所蔵・京都府庁史料（一般）「薪炭木産出并消費高等調査」（明治12.7～13.6）を元に作成。
注：「■」は史料の破損により判読不明であることを示す。

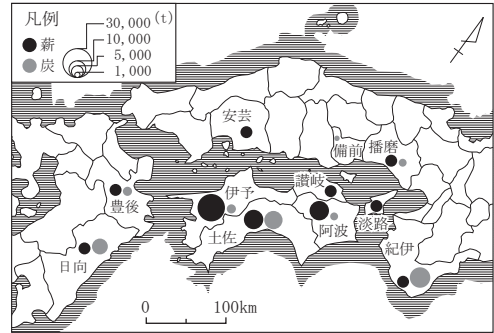


図4 大阪への薪炭移出地および量（1877年）
資料：「地理局雑報」12号の「各所ヨリ大坂ニ入込薪炭其外品類取調表」より作成。
注：薪は1貫＝3.75kg，炭は1俵＝15kgとして換算した。

および伏見の産業化⁴⁵⁾により薪炭の需要が増し、それにとまって燃料販売店が増加したと考えられる。

19世紀後半に刊行された買物案内記、「都商職街風聞」（1864年）⁴⁶⁾と「工商技術都の魁」（1883年）⁴⁷⁾には、京市中の燃料販売店の住所が記載されている。「都商職街風聞」では燃料販売に関する職種は「木炭問屋」として9軒挙げられ、七条通と高瀬川沿岸の松原通から二条通にかけて分布していた。「工商技術都の魁」で燃料販売に関する職種は「炭薪商ノ部」に「炭薪商」「炭賣捌所」「炭団商并炭薪」として14軒記載されている。とくに三条通から七条通にかけての木屋町通および高瀬川筋に多い。これらの分布は、燃料の移入に舟運が用いられていたことと関係している⁴⁸⁾。

図5に、1903年発行および1930年改版発行の「京都商工人名録」に記載された燃料販売店の分布を示した⁴⁹⁾。1903年版では、燃料販売店は「薪炭」に分類され、45軒の店舗の記載がある。1903年時点での燃料販売店は、南北が木津屋橋通から寺之内通にかけて、東西が聖護院町から西高瀬川筋にかけて分布する。とくに南北の通りでは木屋町通と油小路通、東西の通りでは七条通と松原通から御池

〔1903 年〕



〔1930 年〕



図 5 京都における燃料販売店の分布 (1903 年・1930 年)

資料：1903 (明治36) 年発行および1930 (昭和 5) 年改版発行の「京都商人名録」より作成。

注：橋本 (2009) を一部修正。

通にかけて多く見られる。前述の「都商職街風聞」や「工商技術都の魁」に多く記載された高瀬川沿岸や七条通のみならず、鴨川以東や御池通付近まで広がりはじめたことが分かる。

1930年改版では「燃料」の分類のうち「薪炭」に124軒が記載され、この他に燃料として33軒の「石炭・コークス」がある。1930年改版では、南北は今熊野寶蔵町から柴竹にかけて、東西は岡崎から西大將軍にかけて分布が見られる。二条駅付近への分布が突出しており、石炭類が鉄道で運ばれるようになったことに付随するものと考えられる。南北の通りでは川端通、木屋町通、柳馬場通、猪熊通、大宮通、千本通、東西の通りでは寺之内通、一条通、丸太町通、御池通、仏光寺通、松原通、七条通に多くみられる。1903年版と比較すると、七条通以南と御池通以北、および鴨川以東に広がり、八瀬・大原から柴・薪の行商に出た人々も新たに展開した大原街道沿いの燃料販売店に卸すようになった。一方で西木屋町松原と七条東洞院における燃料販売店の集中がみられなくなった。1920（大正9）年に高瀬川水運が廃止されたことによる影響と考えられる。

他方、1908年版以降、「商工人名録」には兼業として取り扱う品目が記載されている。

1930年改訂版において、燃料販売店の兼業として最も多い品目は醤油で26軒、次いで酒が15軒、石炭が13軒、コークスが11軒、白米が7軒、荒物が4軒、炭団が3軒などである。兼業として取り扱われた品目は、白米や調味料の食料品と、石炭、コークスや炭団の燃料に分けられる。薪炭を含む燃料は、生活必需品であったために米屋や酒屋などでも販売されていたと考えられる。その後、1938年発行の「京都商工人名録」では、薪炭店は89軒まで減少し、石炭とコークスは合わせて60軒に増加した。

（2）事例燃料販売店にみる取り扱い品目の推移

出町柳のG燃料店は、1865（元治2）年頃、現店主の曾祖父が開業した。G燃料店における取り扱い品目の推移を図6に示した。曾祖父は、同じく出町柳にあった薬局から分家して燃料の販売を始めた。1890年に曾祖父が46歳で他界したため、祖父は14歳から当時41歳であった曾祖母とともに本格的に燃料販売店を開始した。曾祖父、祖父が店主であった1860年代から1940年代の取り扱い品目は、主に柴と薪であった。第二次世界大戦前は従業員が最多で14名おり、運搬業務を担っていたことから柴・薪の需要の高さがうかがえる。

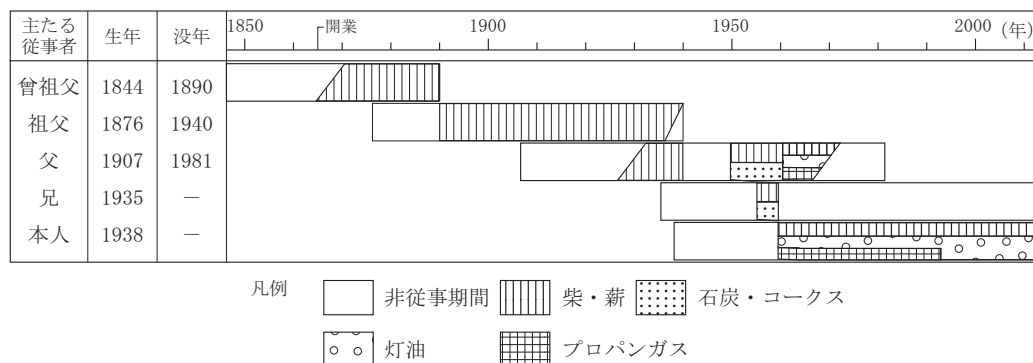


図6 G燃料店の主たる従事者と取り扱い品目の推移（1850年－2010年）

資料：聞き取りより作成。

父は20歳頃から店の手伝いを始めるが、1940年から1945年の第二次世界大戦中は強制労働に徴用され、燃料店の営業を停止した。その後は二条駅近くの燃料店に勤め、1950年に家族のみの経営で燃料店を再開した。二条駅に運ばれてきた宮崎県産のカシ炭、愛媛県産の柔炭、さらに石炭やコークスの卸売りを開始し、市内の燃料店に販売した。1960年になると灯油、プロパンガスの取り扱いを始めた一方で、石炭・コークスの販売を終えた。一般家庭におけるガスの普及は、柴・薪の行商活動の衰退に拍車をかけたことが推定される。

現店主は1958年から市内の園芸店に勤めたが、1960年に兄に代わって燃料店を手伝うようになった。1992年にプロパンガスの扱いをやめ、現在は主に灯油のほかに少量の薪を販売している。薪は1970年代までは一般家庭向けにも販売していたが、それ以降は業務用としての需要だけになったという。

(3) 柴・薪の需要低下にともなう地域の変化

八瀬・大原と京都市街地を結ぶ交通機関は、明治末期から大正年間にかけて整備され、1967年には若狭街道の舗装が大原まで完成した。1923年に洛北自動車株式会社（京都バス株式会社の前身）のバスが出町柳と大原間で運行を開始し、1947年には大原から三条京阪まで延伸した。また、八瀬では1925年に京都電燈株式会社（叡山電鉄の前身）が出町柳と八瀬間の電車を開通させ、叡山鋼索線（叡山ケーブル）西塔橋（現ケーブル八瀬）と四明ヶ嶽（現ケーブル比叡）間を敷設した。同年には八瀬駅前に八瀬遊園地を開園した。

八瀬は、バスの運行開始と鉄道・ケーブルの敷設により、遊園地に訪れる比較的近隣からの客と、比叡山へ登山・参拝する遠方からの客が訪れる地となり、八瀬から柴・薪の行商に出た人々の生活を変化させた。中高年の

女性は、自家栽培の野菜や自家加工の餅などの軽量商品を、叡山電車を利用して市街地で販売したり、ケーブルに乗って比叡山山頂で販売、あるいは八瀬駅付近の飲食店でパートとして働くようになった。一方、男性と若年世代は、交通機関を利用して京都市内に職を求めるようになった。

大原では、既述のように、柴・薪の顧客に歳暮として柴漬けを贈る習慣があった。主に女性が漬物を漬け、男性がシソや漬物となる野菜を栽培する。柴・薪の需要がなくなった後も、シソの栽培・柴漬けの販売は農作業と合わせて行われた。大原で最も早く漬物を店舗販売した会社は、1901年の開業である。柴・薪の需要の低下後、大原の副業は漬物の製造・販売に移行したと考えられる。

1950年代以降、大原には多くの観光客が訪れるようになり⁵⁰⁾、大原の女性は客に柴・薪を販売する形態から、客を迎え、主に自家栽培の商品を販売する形態へと変化した。

V. おわりに

本稿は、京都近郊の八瀬・大原を事例として、明治前期から1950年代までの柴・薪の生産活動および行商活動に着目し、受容地である京市中における燃料販売店の増加および燃料源の転換との関わりをなかで行商活動が衰退する過程を検討した。

八瀬・大原から京市中への柴・薪の行商活動は日帰りを基本とし、その北限は京市中まで約16kmの小出石村であった。大原周辺のみならず、京市中から約20km以内の範囲で山林資源を所有する地域では、同様に柴・薪の行商活動が行われていたことが推察された。柴・薪は自家の所有山林から雑木を採取する場合と、大規模山林地主の山から針葉樹の下草刈りや枝打ちの業務に従事する代わりに刈らせてもらう場合の2種類があった。農業による収入の多少によって、女性とともに男性が行商に出る場合と、出ない場合があっ

た。大規模土地所有者を除く多くの世帯が、農閑余業あるいは農林業の補完収入源として柴・薪の生産および行商活動に従事した。その目安として、近代以降は山林所有面積20ha未満の世帯が行商に出たことが推察された。行商活動は即時換金が可能であったために、八瀬・大原では農林業の合間の補完収入源として重要であった。京市中まで徒歩での日帰りが可能であったために、行商活動および行商に関する作業は農業の合間に行われた。行商活動による販売と同時に行商品の生産も担っていたため、夫婦による作業が基本とされた。夫婦で行商に出ればより大量に積んで運ぶことができた。柴・薪の伐採や裁断、整形など、行商活動に関わる作業がいずれも夫婦で行われたために、行商活動に特化することはなかった。収益の面と作業内容の面から、夫婦のどちらかが欠けると他の職業に就かなくてはならなかった。

柴・薪の行商を行う女性は、代々義母の得意先を維持していた。このため、燃料販売店が増加する以前は、都市住民は定期的に適量を輸送してくる馴染みの相手から柴・薪を購入したと考えられる。燃料の入手方法が限定されていたために、柴・薪の行商活動は必要であった。しかし、燃料販売店が増加すると、行商を行う人々も燃料販売店へ柴・薪を卸すようになった。第二次世界大戦中は燃料不足に加えて薪が配給制となったことで柴・薪の需要が一時増したが、第二次世界大戦後は急速にガスが普及したことで柴・薪の需要がなくなり、柴・薪の行商活動も1950年代中頃に衰退した。行商活動を行っていた世帯では他の職に就かなければならなくなった。八瀬・大原ともに観光業に従事、あるいは都市部への就業へと変化した。

大原女としての柴・薪の行商経験者が高齢かつ極めて少数となった現在では、記憶から往時の行商活動を詳細に復原検討することは困難になりつつある。したがって、行商活動

の衰退過程の検討は、柴・薪需要の経年変化を一般家庭の購入実態などから復元することや、代替燃料の普及とその地域的展開を関連づけたより詳細な分析が必要とされよう。この点は今後の課題としたい。

(筑波大学生命環境科学研究科・院生)

〔付記〕

現地調査に際して、京都市歴史資料館の宇野日出生先生には終始ご指導を賜り、京都大学農学研究科の松下幸司先生および田口標先生には、大変お世話になりました。また、八瀬自治連合会会長玉川勝太郎氏、八瀬天満宮社氏子總代松井昭氏、大原工房の上田寿一氏、福知利昭氏には、貴重な史料の閲覧と複数回に及ぶ聞き取り調査にもご親切に対応していただきました。大原女経験者の皆さま（上野イワ氏、小塩フミ氏、久保ぬい氏、西山時子氏、森ミツエ氏、森口ミヨ氏）をはじめ住民の皆さまには、数度にわたる調査にもかかわらず快くご対応いただき、貴重なお話を賜りました。本稿の作成にあたっては、茨城大学の小野寺淳先生、筑波大学の手塚章先生をはじめとする多くの先生方にご指導いただきました。記して心より御礼申し上げます。

本稿の骨子は2008年の歴史地理学会大会（於：宮城大学）において発表した。本研究の遂行には、平成21～22年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員DC2奨励費、課題番号：21・701）の一部を使用した。

〔注〕

- 1) たとえばMizoguchiによる、バングラデシュにおけるアルミ食器行商人の研究がある。Mizoguchi, T., “Peddling Activities of Aluminumware Sellers in Bangladesh” *Geographical Review of Japan*, 60 (Ser.B) 1, 1987, pp83-102.
- 2) 東京行商に関する地理学的研究にはたとえば以下のものがあるが、この他に県や市町村の自治体史にも報告がある。青野寿郎「九十九里浜に於ける水産業の地理学的研究—九十九里浜海岸平野の地誌学的研究第3報—」地学雑誌44-11, 1932, 611-620頁,

- 地学雑誌45-1, 1933, 37-48頁。青野寿郎『漁村水産地理学研究(第1集)』古今書院, 1953, 105-130頁所収。尾崎席四郎「東京への千葉県日帰行商の地誌学的研究」地理学7-1, 1939, 187-198頁。清水馨八郎「九十九里浜鮮魚自転車行商の発生とその販売圏—交通手段の変革と漁村の変貌の一例—」人文地理5-6, 1954, 28-93頁。関えり子「千葉県北総における野菜行商」法政地理16, 1988, 20-34頁。
- 3) 田中方男「漁村余剰労働力の消化形態に関する一報告—丹後野原部落における海産物行商の実態—」人文地理17-2, 1965, 84-93頁。
 - 4) 北見俊夫『市と行商の民俗』岩崎美術社, 1970。
 - 5) 瀬川清子『販女 女性と商業』未来社, 1971。
 - 6) 溝口常俊「御勅使川扇状地畑作農村における行商行動」人文地理28-2, 1976, 27-56頁。
 - 7) 中村周作『行商研究—移動就業行動の地理学—』海青社, 2009。
 - 8) 増崎勝敏「志賀島のアキナイシについて—福岡県福岡市近郊漁村の女性水産物行商人の事例より—」京都民俗18, 2000, 67-84頁。
 - 9) 小林裕美「佐原のシンノミ畑—地方都市近郊の野菜栽培と行商—」国立歴史民俗博物館研究報告124, 2005, 33-57頁。
 - 10) 脇田によれば、『本朝無題詩』では大原の女性が炭を販売、『中右記』(嘉保2年)では大原で炭を生産、『庭訓往来』には「大原薪」と記され、その風俗は『東北院職人歌合』(建保2年), 『七十一番職人歌合』, 『洛中洛外図』諸本に描かれているという。脇田晴子「大原女」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典第2巻』吉川弘文館, 1980), 904頁。
 - 11) たとえば脇田による研究がある。脇田晴子「中世女性の役割分担—勾当内侍・販女・勸進比丘尼—」歴史学研究542, 1985, 16-30頁。一方、田端による、古代から中世末に及ぶ大原の領主の変遷、文学作品に描かれた平安時代の大原女、『七十一番職人歌合』や『洛中洛外図』上杉家本などに描かれた中世後期の大原女の装束と特徴を考察した研究もある。田端泰子「大原郷と大原女」(京都橘女子大学女性史文化研究所編『家と女性の社会史』日本エディタースクール, 1998), 41-68頁。
 - 12) 岩田英彬『近畿民俗叢書6 大原女』現代創造社, 1984。
 - 13) 橋本暁子「近代における大原女の変化—大原と八瀬の比較を通して—」交通史研究63, 2007, 29-52頁。
 - 14) 橋本暁子「近代の京都における燃料販売店の推移」大原古文書研究会会報50, 2009, 13-17頁。
 - 15) 松下幸司・田口 標「近世における大原の柴商売について」大原古文書研究会2007年9月例会資料, 2007。
 - 16) 田口 標・松下幸司・宇野日出生「京都大原の山林文書(一)」生物資源経済研究13, 2007, 112-124頁。田口 標・松下幸司・宇野日出生「京都大原の山林文書(二) 御入木山代官木村宗右衛門を中心として」生物資源経済研究14, 2009, 142-194頁。田口 標・松下幸司・宇野日出生「京都大原の山林文書(三) 御入木山における山林売買を中心として」生物資源経済研究15, 2010, 94-126頁。田口 標・松下幸司・宇野日出生「京都大原の山林文書(四) 木村宗右衛門による御入木山支配を中心として」生物資源経済研究16, 2011, 115-172頁。
 - 17) 京都市歴史資料館編『叢書京都の史料4 八瀬童子会文書 増補』京都市歴史資料館, 2003, 史料1および7-8頁。『八瀬童子会文書』は、社団法人八瀬童子会所蔵、京都市歴史資料館寄託の、中世から現代までの八瀬に関わる文書群である。
 - 18) 宇野日出生「八瀬の年中行事」京都市歴史資料館紀要17, 2000, 1-42頁。
 - 19) 宇佐美隆之『日本中世の流通と商業』吉川弘文館, 1999, 50-72頁。
 - 20) 橋本暁子「『大原栢』と大原」大原古文書研究会会報17, 2006, 3-10頁。
 - 21) 『京都府地誌』は『皇国地誌』の編纂にあ

- たって京都府が提出した稿本であり、1881(明治14)年～1884年にかけて作成された。
- 22) 京都府愛宕郡役所編, 1911, 京都府立総合資料館所蔵。
- 23) 1780(安永9)年刊行の『都名所図会』の八瀬の挿図には、柴・薪を頭上運搬する女性3名、天秤棒運搬する男性3名、馬2頭が描かれ、女性のみならず男性も柴・薪の運搬に従事したことが読み取れる。このことから、遅くとも18世紀後半には、女性は男性とともに柴・薪の行商を行っていたと考えられる。
- 24) 小泉袈裟勝『単位の起源事典』東京書籍, 1982, 193頁をもとに算出した。
- 25) 大原における製炭活動を示す記録はあるが、生産および流通の詳細については調査中のため、本稿では記述しない。
- 26) 大原自治会蔵の「木柴商売人数定之事」を紹介した松下・田口は、1777(安永6)年頃の史料と推測した上で、大原8か村すべてが柴の商売にかかわり、その戸数は、全戸数270軒の31.9%にあたりと指摘した。18世紀後半においてすでに当該地域では柴の行商活動が広く行われていたことをうかがわせる。前掲15)。
- 27) 柳田は大原を訪れた際の記録に、「大原では屑綿の工場を見学。小出石より出町まで、1駄40貫の運賃は25銭。1車に5駄を積むがきまり。柴は1束1貫500匁内外、仲買には之を2銭5厘にて賣る。割木は1束4貫、柴3束を以て之に充つ。價はクヌギなら1束16銭、雑木12銭。牛車は大抵薪伐る者の自用、且つ其3割までは自分の山を伐る者なり」と記しており、小出石から出町柳まで柴・薪が運搬されていたことを示唆している。柳田國男「美濃越前往復」『北國紀行』実業之日本社, 1948。『定本柳田國男集 第3巻』筑摩書房, 1981, 200-201頁所収。
- 28) 八瀬松井昭家所蔵。「土地台帳」は、現当主の祖父が八瀬の村長を務めた際の史料である。松井家は、1890(明治23)年当時31haと八瀬で最も多く山林を所有した。現在は松井家を含む集落内の3家が八瀬の山林の70%を所有するという。
- 29) 前掲17) 145-149頁。なお、『八瀬童子会文書』の「御要用記録大帳」には、1877(明治10)年における125世帯と1寺の持高が記されている。これによれば、8石以上13石未満が7名(5.6%)、4石以上8石未満が16名(12.8%)、2石以上4石未満が16名(12.8%)、1石以上2石未満が11名(8.8%)、1石未満が75名(60%)と1寺である。持高8石以上の7名のうち4名は、前掲28)の「土地台帳」に記された20ha以上の山林所有者6名のうちの4名と一致する。
- 30) 前掲17)、『八瀬童子会文書』の中には、1415(応永22)年から1638(寛永15)年まで八瀬と大原、高野、比叡山との間で起こった山論に関する史料が存在し、その中で八瀬は薪の伐採が生計の維持に不可欠であったことを訴えている。こうした度重なる山論は、八瀬とその周辺集落において、柴や薪が重要な収入源であったことを示している。
- 31) 大原来迎院町所蔵。
- 32) 大原8集落のうち、来迎院以外の集落については、林野の所有者を示す史料は管見の限りでは見当たらない。しかし、聞き取りによれば、他の7集落でも個人の所有のほかに寺院による所有と大原村内の他の集落居住者による所有があるという。
- 33) 前掲13) 41-44頁。
- 34) 聞き取りによれば、青柴とはホスやクヌギの枝で、柴と異なり、蒸すと黒くなる特徴を持つ。青柴は、夏季に葉が付いた状態の枝を60～80cmの長さで採取し、葉が落ちる直前まで乾燥させて直径50cm程度に束ねて京市中の麴屋に販売した。麴屋では青柴を灰にして酒麴に混ぜて蒸した。
- 35) 岩田によれば、薪3束は12貫(45kg)に相当するという。前掲12) 82-84頁。
- 36) 谷北謙三郎『八瀬大原の栲』無竹庵, 1925。
- 37) 頭上運搬をする大原女は、重量物を頭に載せる際、頭を守る緩衝のために「ワ」を載せた。大原女の女性は「ワ」を大切に扱っており、尻の下に敷いたりすることはなく、必ず木の枝などにかけておいたという。前掲12) 90-92頁。
- 38) 大原の柴漬けは、キュウリやナスを自家栽培

培したシソで漬けたものである。大原の寒暖の気温差と日照時間がシソの栽培に適するという。近年の大原では、シソは3月20日前後に前年度収穫した種を苗床に播き、5月に畑に定植する。7月から8月に柴漬けの漬け込みの時期に合わせてシソを刈り取り、刈り取らず残したシソは9月に結実する。

- 39) 大原の女性のように前掛けをカラゲて巻きはしなかったが、町中では「大原女さん」と言われることもあった。
- 40) 八瀬・大原では薪の束を柴で包んで柴の束のように見せる「ノリ巻」にして運搬したという。前掲12) 121-122頁。
- 41) 岩田は「村で商売をしている家や、特に裕福な家はそのような商いはしなかったようである」ため、行商の頻度は厳密には言えないが、「所有している田畑の広狭によって、農作業との労働時間の配分」が生じ、「人によると、月に一度行くか、行かないかだったと言う人もあるが、本格的に薪や柴の商いをしている人は、盛んなころは一日はさみぐらいで京に出て行ったという所が実情らしい」と記している。前掲12) 113-114頁。
- 42) 岩倉でも柴・薪の生産・運搬・販売が行われていたことが報告されている。中村治『あゝのころ京都の暮らし—写真が語る百年の暮らしの変化—』世界思想社、2004、28-31頁。
- 43) 京都府立総合資料館所蔵、行政資料、京都府庁史料（一般）。「薪炭木産出並消費高等調査」は、京都府が農商務省山林局へ提出したものの控えである。調査項目の中には、①管内（上京区、下京区、伏見区）における製鉄、製茶、製塩、製糖、陶器、瓦磚具のほか、官設民設を含む諸工作や製造所における1年間の薪炭の需用量を調査したもの、②管内で1年間に産出する薪炭数を調査したもの、③管内の間屋が他府県の

間屋へ水陸輸送を用いて取引した量を調査したもの、④他府県から管内への輸入量を調査したものがあつたようである。しかし、①は破損が激しく遺失部分が多く、②は資料そのものが残されていない。③は伏見区のみ資料しか残されていないため、本稿では④のみを使用した。

- 44) 「地理局雑報」を用いて東京へ移入される薪炭の量を示した研究として白井が挙げられる。白井 豊「明治10年代における下総台地西部の土地利用と薪炭生産—迅速側図と『偵察録』の分析を通して—」歴史地理学44-5, 2002, 1-12頁。
- 45) 前掲43) ①には、薪炭の需用元として官設の鉄具製作所や洋紙製造所のほか、民設の醸酒所、製茶製造所、醤油製造所、鋳物製造所などが記されている。産業化により、燃料として多くの薪炭を必要としたことがうかがえる。
- 46) 京都府立総合資料館所蔵。「都商職街風聞」には、314業種、1,155名の商職人名とその住所が記載されている。
- 47) 京都府立総合資料館所蔵。「工商技術都の魁」には、184種、2,300名の商職人を収録する。
- 48) 京都市『京都の歴史5近世の展開』学芸書林、1972、349-352頁。
- 49) 以下、「京都商工人名録」を用いた分析は、「大原古文書研究」50号に一部掲載した。なお同誌は大原地区の古文書研究会の会報（コピー版）である。前掲14)。
- 50) 高度経済成長期には、デュークエイセスによる「女ひとり」（1965年）のヒットを契機として大原は全国的にも広く知られるようになり、さらに1970年の日本万国博覧会（大阪万博）の開催にあたり、大原に宿泊施設が激増した。観光客の中には「大原女」を見るために大原を訪れる客も多く、これらの店舗での接客には、京市中で柴・薪を売り歩いた際の衣装が用いられた。

Peddling Activities of Firewood Sellers in the Suburbs of Kyoto:
Case Study of Yase and Ohara Villages from the 1870s to the 1950s

HASHIMOTO Akiko

Peddling activity was one of the traditional trade activities in Japan that decreased rapidly after the mid 1950s. This study focused on female firewood sellers who supplied fuel before the mid 1950s in Kyoto. Additionally, the study focused on the production and trade activities of firewood sellers in Yase and Ohara -suburbs of Kyoto- by studying the changes in peddling activity in the context of its relationship with the center of Kyoto and its suburbs.

The results of the study revealed the following points. The female firewood sellers in Yase and Ohara usually had one day trip, and lived approximately 20 kilometers (north maximum) from the center of Kyoto. There were two ways of collecting firewood. One was to cut branches from their forests, and the other was to cut branches from the large mountainous forests of landowners instead of mowing underbrush and pruning. These female firewood sellers earned a living through agriculture and sold firewood to supplement their income. Many households engaged in peddling, except for large landowners who owned forests of 20 hectares or more. A husband and wife worked together, and if either one was unable to work, the partner had to seek additional work related to other occupations to earn a surplus income. In order to earn a surplus income, peddlers looked for long-distance customers or made the firewood look better. However, because firewood and coal stores operated their business along the Ohara street in the 1930s, the female firewood sellers shifted from face-to-face selling to wholesale distribution in the 1940s. Although the demand for firewood increased owing to fuel shortage and the firewood rationing system during the wartime period, the demand for firewood decreased after the war because of the rapid spread of the use of gas in the mid 1950s.

Key words: Modern times, Kyoto, the Suburbs of Kyoto, Peddling Activities, OHARAME